○山田の庄、丹生、原野および火の岡峠盡く地名なり

○扇の松は須磨附近に在り

○古今集
烏羽玉の闇はあやなし梅の花色こそ見ねね香やはかくるゝ

〰山又山の山田の庄へ〰丹生や原野も烏羽玉の〰色こそ見ねね吹かぜに〰もゆる火の岡峠路や、あふげばたかき鐵拐の

○扨て義經、辨慶を召させられ軍機を誤るたそれあり〰搜し來れと仰せければ此所彼所こもこめしに近づき見れば茅が軒〰いかに此家に誰かある

〰越行く駒のあがきさへ〰闇はあやなし梅のはな〰〰かをりかくれぬ若草のたれをかまねく扇の松麓にたどりつきにけり〰闇路に迷ひ時うつらば汝如何にもして導く者を〰辨慶たほせを蒙りて遁かかなたに火影あり

今度平家追討の爲め〰此所まで來り給ひしも、イザ速に案内せよと〰家の内には翁の聲にて〰いそぎ子息を呼び起し、去程に義經、辨慶に打向ひ名は何と申し年は何才ぞとサン候此者は鷲尾三郎と申し、扨ては三郎、汝今日より名を經春と下したまひ九郎御曹子義經公此さき道の程覺束なし、聲たからかに申けり〰そは最と易き御事也と〰甲斐々々敷も出しけり〰其者は世の常の者共見ねず、御尋あらせ給ひければ本年十七才なる由にて候也〰我に仕へて忠勤せよと、御物の具を引せければ〰

―經春嬉しさ面にあふれ
されば經春先きに立ち
あかしの浦のかゞり火も
聲も聞にんばかりなりゝ
眼下に敵陣を瞰下して、
先づ試に馬のみを―
ソレ落せよと七八頭
其内四五頭つゝがなく
義經此さまを見給ひて
我爲す樣にならへやと
主從の誓をゞなしたりけるゝ
行けば程なくほのぐと
きにて淡路の島千鳥
斯くて義經馬を止め
攻下らんは此所よりぞ
落して見よと仰せければ、
崖下にこそは追遣れば、
麓に下り立ち斷きたりゝ
斯くては心易かるべし
馬に鞭打ち乘下るゝ

むくれはせじと三千騎
勇みに勇み引續けば―
先陣の鎧甲に觸接し―
前代未曾有の有樣は―
平家は不意を襲はれて
蹄にかけられ傷くもの―
―宛然あらはす阿鼻地獄―
折しも山手の假屋より―
見る〳〵内に平家の本營
烟となりて失せけるは
早瀨をわたるわか鮎の
後陣の鎧の裾
戛々の響を生じ、
鬼神の所爲ごと見にけるゝ
さきを爭ひ遁げまどひ、
海に溺れて死するもの―
修羅の街ぞすさまじきゝ
火の手忽ち起りければ
唯一陣の北風に
あはれはかなき次第也ゝ

實に義經のいさをしは　何にくらべんくらま山
〜鞍馬たろしの烈しさに　〜唐くれなゐの紅葉葉の
〜ちりてたゞよふ矢島潟へ　〜昔しの須磨の跡訪へば
〜波間にたかく弓はりの　〜月のみ今も見ゆるらんへ
是れ竹帛にかをるてふ　いくさの花の逆落し
開らけ行く世に傳はりけり　開け行く世に傳りけり

主、頼光
寅、四天王
卯、酒顛童子
巳、丹波國大江山

○源頼光は鎮守府將軍滿仲の子なり人と爲り英武驍勇世に冠たり射を善くす將略あるを以て稱せらる攝津伊豫美濃等の諸國守を累歷し內藏頭を兼ぬ左馬權頭に遷り內昇殿を聽る

大江山

普天の下王土に非ざるはなく〜　率土の濱王臣に非ざるはなし、
況して帝都に程近き〜　丹波の國大江山をば
我物顔に住家として、　上を輕しめ民を惱し
出沒不思議の惡鬼共　退治せよとの宣旨に依り、
源の頼光、四天王を率ひ〜　討手にこそは向ひけり〜
○見渡す限り山又山　峨々たる巖、天に聳へ、
谷に碎くる水の音　淙々として地に響き、
嶺森々と生ひ繁る　萬木雲をつらぬけば
月日の影も眼に見にぬ〜　鬼住む山ぞたそろしきへ

され正四位下に至る（大日本史）

○四天王　渡部綱　碓井貞光　占部末武　坂田金時

○扨ては進退谷れり以下は頼光主従の語入

よそめを覆ふ篠懸の
〜金剛杖にすがりつゝ
〜河のほとりに來りしに
いかにそれなる女性に言問はん
いたくつかれて候へば
言れて女性は大に驚き〜
名を聞くだにも恐しきー
今しもあれ、見附けられなば御大事ー
切りに勸められければ〜
ちよよし吾等は修驗者故
たのまば鬼も害すまじ

山伏すがたの主従は
〜木の根岩角攀ぢ傳ひ
衣をあらふ婦人あり〜
吾等山路に踏みまよひ
宿借る方を知らせよとー
此所を何處と思すらん
鬼住む山と知り給はずや〜
疾く〜麓に下られよと
扨ては進退谷まれり、
〜是非もなみだか白露を
推測かられてあはれ也〜
數多の美人眷族を相手とし
黄金色濃き山吹を
是は霞にかゝりたるー
一盃酒を振舞ふて
骨迄しやぶり申さんと
ヤガテ山伏共を呼出し
頼光四天王に晌せしつ
△鳴るは瀧の水鳴は瀧の水ー

○扨ては進退谷まれり以下は頼光主従の語入

みちびき給へと夕暮に
〜分けていざなふ心の中
○爰に岩窟の棟梁酒顚童子は
酒宴なかばに酣鬼は
積める三方捧げ出で〜
ー椋鳥どもの献上物
後は我等の手料理に
ほこり顔にも述立たり〜
一差舞へと强ひければ
扇にッ取り立ち上がり〜

りければ唯修驗者の惡鬼に慘殺せられん事を婦人のあはれに思ひつゝ導き行く風情を思ひやりたる意なり

○霞は鳥を捕るあみの名

○椋鳥は修驗者を指していふ語なり

一日は照るとも絶にずー
謠ふを合圖に四天王
ー頼光童子をハッタと睨み〈
汝等誅罰の勅命を蒙り
イザ速に誅に服せと大音聲〈〈
童子は惡鬼の形となり
寒夜の星と輝きつ
熊手の如き大手を擴げ
サシッタリと頼光、髭切を拔き翳し
行劍の德にたぢろ
ダ〳〵〳〵と進みよ〈〈

◎髭切は源家の重寶、名劍の銘

とうたり〳〵疾く〳〵立てや人々と、
一度にドット立ち上れば
我こそは攝津の守源の頼光也
討手に向ひ來りしぞ
時に山谷鳴動し
角は三日月・兩眼は
火焔を降らし土石を飛し、
唯一と掴と飛掛る〈〈
悠然として切り拂へば〈〈

斯る所に阪田の金時走せ來り〈〈
ムンズと組んだる有樣はー
〈〈いづれをそれとうつせみの
めざましかりける勢也〈〈
人と鬼との力足〈〈
大地も裂けむ許にて
〈〈惡鬼のをめき叫ぶ聲
〈〈鳴神としもきこゆらむ〈
微塵となれと投げ附くれば、
眷族共を切り散し、

彼奴は某承り申べしとー
〈〈夕日に輝く紅葉々の
〈〈から紅の仁王立ちー
ドウ〳〵〳〵と踏み鳴らす
山鳴り響き谷應へ、
暫し勝負もあらくれの
〈〈みやこの空に時ならぬ
金時いらッて大力込め
綱は貞光、末武と
御前に走せ寄り鬼を捻伏せ

大首サット打落せば
頼光公の御兜に
頼光靜に角を採り
凱歌あげて源の
都をさして歸りけり

首は虚空に飛上り
オウ〳〵ドウト嚙み附きたり
なんなく首を捻ち離し
氏の威光を輝し
都を指てぞ歸られける

淨瑠璃御前

主、淨瑠璃姫　冷泉
賓、牛若丸
處、三州矢矧

○淨瑠璃姫は三州矢矧驛長金高の孫女なり伏見中納言師仲保元年中下野に流さる、爰に宿して金高の女と通じ姫を生む牛若丸奥州に下るとき驛を過きて絃歌の聲を聞き笛を吹て之に和す、姫

古歌にもためし在原の
澤邊に香るかきつばた
矢矧の長者の一人姫
峯の藥師の申子にて
光まばゆきよそほひは
さてつれ〴〵の月の夜に
月ともしろく影きよし
喃方々と仰せければ
淨瑠璃御前は琴の役へ
名殘をこゝに三河の國
たづねて引くや梓弓
淨瑠璃御前と仰せしは
瑠璃や琥珀のなりかたち
花もはぢらふ風情なり
姫は侍女等を召されつゝ
管絃を奏して樂みなむ
ヤガテ役々こゝのへて
爪音やさしく搔ならす

延入れて遂に此に宿せしむ、牛若再會を契り名笛薄墨を與へて別れ去る期を過きて遇はず、姫慚恨嘗根川に投して死す、侍女冷泉悲歎して尼となると云ふ（聲曲類纂）

夏上
しらべにかよふ松風は
中
籠れる千代の聲さそふ
下
これぞゆかしき想夫戀へ
七
こゝに御曹子牛若丸は
六
今宵こなたにかりの宿、
五
都はなれてはるゞと
三
きつゝもなれぬ旅衣、
四
千々に物憂き折しもにー
四
奥の管絃のきこゆれば
冬上
そゞろに心ひかれつゝー
中
窃に寢所をしのび出で
下
聲をしをりに枝折戸のー
ーかげに彳み聞きたまふへ

琴歌

想夫戀の唱歌は比翼の翅の雲井をこひ、
盤渉調のしらべは松の連理の枝に通ふ、

四
かほど音聲、ほど拍子ー
あら面白のしらべへ

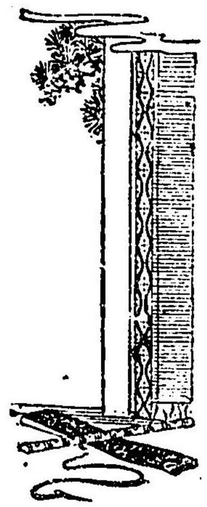
○蟬折、笛の名

四
鄙にまれなる音樂にー
笛のなきこそ不思議なれへ
七
實にや吾妻の慣ひにてー
四
態と笛をばいれぬかやへ
三
さばれ某よそながらー
樂に合せて吹かなんと、
四
かの蟬折をこりいだしー
三
八ツの四歌口打ちしめしー
ー音色涼しく吹き給へばー
月上
月もろともに澄み渡り
中
數の樂器は音をたれて
下
蟬折ばかりぞ優りけるへ
四
奥のひゞく感に堪へー
しばし聞入居たりしが、
三
稍ありて、淨瑠璃御前、
四
さても妙なる笛の音やー
ーいかなる人にてたはすらむ、
四
たれか窃に見て來よとー
三
ーいはれて冷泉庭に出で、
七
ひとむらしげる尾薄のー

六 ほのかに主を見侍れば　山上 雪の肌に花の面
中 年はいざよひ今匂ふ　下 月こも見ゆるたもかげは
三 世にたぐひなき稚児姿　三 左折の御烏帽子を召給ふこ
四 いごこまやかに申けり　七 偖は源氏方の御末ならむ
四 いごほしのたん事やな　三 しばしたり共今こゝに
四 請じてなぐさめ申さばや　四 いまし計らひ給ひねこ
冬上 ゆふ露置ける紅葉々の　下 顔にうつらふ景色なりへ
七 冷泉うなづきしづ〳〵こ　六 牛若丸にちかづきて
四 ならはせ給はぬ驛路に　四 さこそ御疲れ給ふらめへ
六 いこの内に　待つる人のましませば

人らせ給へこ引く袖を　拂らひかねてか御曹子
奥の一間に成らせけりへ　折しもたこる浮雲に
月の光もうすれしがヌ　七 たちまち一天掻き曇りへ
六 いこ凄じくなる神の　五 響は空にこゞろきて
五 ザット降り來る俄雨へ　七 侍女等は部に立ちさわぎ
六 そばに侍べる者もなしへ　五 ひらめく光いなづまか
四 いなにはあらぬ浄瑠璃姫　上 たもはゆげなる執成は
中 雨になやめる海棠の　下 露もあふるゝ計りなり
三 いかなる人の袖の上に　五 かゝる情の露ならん〳〵

琵琶歌卷の一終



明治三十九年八月一日印刷
同　三十九年八月十日發行

著作者　工學士　逵邑容吉

發行兼印刷者　東京市日本橋區通一丁目拾七番地　青木恒三郎

印刷所　大阪市西區新町北通一丁目六十五番屋敷　嵩山堂印刷部　電話西七八貳番

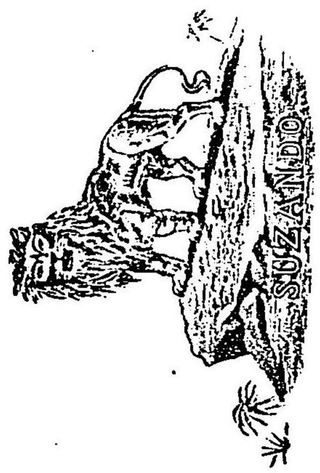
發行所　大阪市東區心齋橋筋博勞町角　青木嵩山堂　電話局東貳五〇番

發行所　東京市日本橋區通一丁目角　青木嵩山堂　電話局本局七八九番

琵琶歌　定價金四拾錢

著作權所有

SUZANDO


SUZANDO

特23
413

琵琶歌 1

達邑容吉

国立国会図書館

074711-001-3

特23-413

琵琶歌

達邑　容吉／著

M39

CEJ-0299